

## 3) 角膜真菌症の臨床的検討

田沢 博・坂上富士男  
大桃 明子・本山まり子 (新潟大学眼科)  
宮尾 益也・大石 正夫

1983年から1987年の5年間に角膜真菌症と診断された18例18眼の発症誘因、臨床症状、視力予後などについて検討した。

(結果) 発症誘因としては、角膜外傷の既往が認められたもの5例、ステロイドが投与されていたもの5例であった。局所所見として、汚い灰白色の潰瘍は全例に、Hyphate ulcer, 衛星病巣は33.3%に、免疫輪は16.7%、前房蓄膿は55.6%に認められた。角膜擦過物のパーカーインク KOH 法による直接鏡検で真菌の検出されたものは13例、72.2%であった。真菌が分離できた症例では *Fusarium* が最も多く3株だった。治療は、ピマリシンの点眼は全例に、抗真菌剤の結膜下注射は4例に、ミコナゾールの点滴は7例に行われた。角膜移植は3例に行った。視力は初診時、0.01以下が10例と半数以上で、治療後も0.01以下のものは4例で診断の遅れたものに多かった。

(考察) 難治性の角膜潰瘍では、必ず本症を疑い、早期診断が重要である。

## 4) 内眼手術における術後感染予防の現況

坂上富士男・田沢 博  
宮尾 益也・大桃 明子 (新潟大学眼科)  
本山まり子・大石 正夫

眼科領域における細菌感染症の中でも、細菌性眼内炎は発症が速やかで、視力予後不良となり易い重篤な疾患であり、その発症を予防することが重要となる。

術後眼内炎の起炎菌は1945年から1968年の報告では *S. aureus* が約80%と最も多く、グラム陽性球菌が多数を占めていたが、その後グラム陰性桿菌によるものとして *P. aeruginosa* の増加が目ざされ、さらに最近では *S. epidermidis* が約30%と多くなってきている。

昨年当科で術後感染予防のための抗生剤投与方法に関して全国的にアンケート調査を行ったところ、83%の施設で抗生剤術前投与を行っており、術後はアミノグリコシド系の点眼とセフェム系、ペニシリン系を3日から7日間内服、セフェム系、アミノグリコシド系の3日前後の注射を行う施設が多かった。

術後眼内炎の発症には局所の常在菌が関与することが多く、術前からの抗生剤投与による無菌化と、術後の *Staphylococcus*, *P. aeruginosa*, 嫌気性菌などにも有効な抗生剤投与が適当と考える。

## 5) 遅延型過敏反応における penam 剤と cephem 剤間の交叉性

—臨床試験と動物実験での検討—

宇野 勝次 (水原郷病院薬剤科)  
山作 房之輔 (同 内科)

penam 剤過敏症患者10例と cephem 剤過敏症患者20例に対して、leucocyte migration inhibition test (LMIT) を用いて交叉試験を行い、delayed type hypersensitivity (DTH) における penam 剤と cephem 剤間の交叉性を検討し、この臨床試験の成績を確認する目的で、動物実験を試みた。

penam 剤過敏症患者10例に対する LMIT の交叉陽性率は、penam 剤群に56% (10/18)、原因薬剤と側鎖に類似構造を有する penam 剤群に71% (10/14)、側鎖に類似構造を有さない penam 剤群に0% (0/4) を示し、cephem 剤群に8% (3/38)、原因薬剤と側鎖に類似構造を有する cephem 剤群に16% (3/18)、側鎖に類似構造を有さない cephem 剤に0% (0/20) を示した。一方、cephem 剤過敏症患者20例に対する LMIT の交叉陽性率は、cephem 剤群に48% (31/64)、原因薬剤と7位側鎖に類似構造を有する cephem 剤群に65% (17/26)、3位側鎖に類似構造を有する cephem 剤群に75% (12/16)、側鎖に類似構造を有さない cephem 剤群に9% (2/22) を示し、penam 剤群に3% (1/34)、原因薬剤と側鎖に類似構造を有する penam 剤群に4% (1/26)、側鎖に類似構造を有さない penam 剤群に0% (0/8) を示した。

動物実験は、動物にモルモットを使用し、感作薬剤として共に同じ側鎖構造を有する penam 剤の ABPC と cephem 剤の CEX の他に、penam 剤の母核の 6APA、cephem 剤の母核の 7ACA、ABPC と CEX の両者の側鎖構造自体の phenylglycine を加えた5種類の薬剤を免疫し、交叉試験に遅延型皮内反応と LMIT の2つの方法を用いた。感作モルモットにおける遅延型皮内反応と LMIT の結果は、ほぼ一致し、臨床試験の成績を支持するものであった。即ち、ABPC による DTH では、類似構造を有する penam 剤の PCG や 6APA の他に、類似構造を有する cephem 剤の CEX、LMOX や 7ACA にも交叉反応を認めたが、CEX の場合には、cephem 剤の LMOX、CET や 7ACA にしか交叉反応を認めなかった。一方、6APA による DTH では、penam 剤の他に 7ACA にも交叉反応を認めたが、7ACA の場合には、cephem 剤にしか交叉反応を認めなかった。また、phenylglycine による DTH は、成立しにくい結果